

ベリンスキイとナヂェージヂン

——リアリズム思想の形成の問題をめぐって——

藤井一行

一

ベリンスキイの批評家としての出発はナヂェージヂン (Надеждин, Николай Иванович, 1804—1856) の仕事と深いかわりをもっている。モスクワ大学を追われて失意の日々を送っていたベリンスキイは一八三三年二月、いかなる機縁によってか明らかでないが、モスクワ大学の芸術理論・考古学の教授であり、かたわら「望遠鏡」(Телескоп) という雑誌を編集・発行し、みずからも健筆をふるっていたナヂェージヂンの知遇を得る。⁽¹⁾ 初めは翻訳の仕事を手がけていたが、翌年には事実上の処女作とも言うべき文学評論『文学的空想』(《Литературные

Мечтания》) を発表して世の耳目をおどろかす。爾後、チャフダーエフ (Чадаев, Петр Яковлевич, 1794—1856) の『哲学書簡』(《Философическое письмо》) を掲載したかどで一八三六年に「望遠鏡」が発禁処分を受け、るまでの二年間に、ベリンスキイはナヂェージヂンの雑誌発行の仕事に力を貸しながら、『ロシアの中編小説とゴーゴリ氏の中編小説について』(《О русской повести и повестях Г. Гоголя》, 1835)、『ヴラザーシル・ベネチクトフの詩』(《Стихотворения Владимира Бенедиктова》, 1835)、『無じかんすゑ無』(《Ничто о ничем》, 1836)、『モスクワ観察者』の批評と文学観について』(《О критике и литературных мнениях Московско-

Го Наблюдателя》, 1836) などロシア文学史上に足跡を
とどめる一連の諸論文をあいづいで世に送りだして行く。
ナヂェージヂンはチャアダーエフ事件⁽²⁾によって流刑に
処せられるが、一八三八年、許されて流刑地からもどる。

しかし、文芸評論家としての仕事には永久に終止符を打
ち、その後は民俗学の分野での研究に専念する⁽³⁾。ベリン
スキイとナヂェージヂンとの交渉も「望遠鏡」の発禁と
ともに終わりをづけ、ナヂェージヂンが流刑地からもど
つてのちも二人の関係は復活しない。

ナヂェージヂンは初めナドウムロ (Николай Надоу-
МКО) なる筆名で「ヨーロッパ報知」(Вестник Европы)
誌に反ロマン主義を基調とする『来たる年についての
文学的懸念』(《Литературные опасения за будущий
год》) を発表して (一八二八年) 文芸評論家としてデビ
ュー、『無知なる人々の群』(《Сомнище неписигов》,
1829)、『二編の韻文小説——「舞踏会」と「ヌーリン伯』
(《Две повести в стихах: „Баг” и „Граф Нулин”》,
1829)、『エウゲーニイ・オネーギン』第七章にかんする
評論 (一八三〇年) などをおいづいで発表して世の反響
を呼んだ⁽⁴⁾。そのかたわら博士論文の準備をすすめ、『ロ

マン主義的と称される詩歌の起源と本質と運命につい
て』という題名のラテン語で書かれた論文で一八三〇年
に学位を得た。この学位論文はその拔萃がロシア語に訳
されて同年の「ヨーロッパ報知」と「アテネイ」(Ате-
неи) 誌にそれぞれ分載された。学位取得後、ナヂェー
ジヂンはモスクワ大学の芸術理論・考古学の正教授のコ
ンクールに応募して合格、一八三一年の暮に就任 (一八
三五年に退職)、翌年の始めから開講する。その頃まだ
文学部の学生であったベリンスキイも熱心にナヂェージ
ヂンの講義を聴いていたとつたえられる⁽⁵⁾。

「ヨーロッパ報知」が予約者を失って廃刊の止むなき
にいたつたため、ナヂェージヂンは一八三一年の一月
から雑誌「望遠鏡」とその付録として新聞「うわさ」
(Молва) をみずから手で編集かつ発行しはじめ⁽⁶⁾。
「望遠鏡」の創刊号は『啓蒙の現代の傾向』(《Совре-
нное направление просвещения》) という表題の巻頭
論文で飾られた。爾後、ナヂェージヂンは『ボリス・チ
ドゥノフ——А・ブーシキンの作品』(《Борис Годунов.
Сочинение А. Пушкина》, 1831)、『美教育の必要性と
意義と効力』(《Необходимость, значение и сила эсте-

тического образования》, 1831)、『祖国の文学の年譜
——一八三一年についての報告』(《Летопись отече-
ственной литературы. Отчет за 1831 год》, 1832)、『一
八三三年のロシア文学の概観』(《Обозрение русской
словесности за 1833 год》, 1834)、『ロシア文学との関
係におけるヨーロッパ主義と国民性』(《Европеизм и
народность в отношении к русской словесности》,
1836)などの諸論文を同誌に執筆している。

ナヂェーリヂヂンの批評家として、また学者としての仕
事がペリンスキイの批評家としての形成にいかにかかわ
っているかについてはいずれの側にも直接的言及はない。
しかし、ペリンスキイの側にはナヂェーリヂヂンの仕事に
ついての評価がわずかながら残っている。その最初のもの
はペリンスキイがナヂェーリヂヂンを個人的に知るまえ
に発表した、『ボリス・ゴドゥノフ』についての書評(一
八三一年)である。ペリンスキイはそこでナヂェーリヂヂ
ンが前掲の『ボリス・ゴドゥノフ』論でこの悲劇に正当
な評価をあたえたものの、それは流れに抗して泳ぐのが
好きなことのゆえだと指摘、必ずしも肯定的とは言えな
い判断を示している。⁽⁸⁾しかし、ナヂェーリヂヂンを知って

のちの『文学的空想』には彼の著作からの豊富な引用が
見られるとともに、ペリンスキイは「ヨーロッパ報知」
でのナヂェーリヂヂンの仕事を既成の権威への大胆な挑戦
ロシアがヨーロッパなみの文学をもつという幻想の破壊
を意味するものとしてとらえ、これにすこぶる積極的な
評価をくだしている⁽¹⁰⁾。このあと「望遠鏡」時代
のペリンスキイにはナヂェーリヂヂンの仕事にかかる論及
はほとんど見られないが、「望遠鏡」の発禁後は総じて
きわめて否定的な反応を示すようになる。ペリンスキイ
はナヂェーリヂヂンを、あるいは、誠実さも信念も真理と
芸術への愛も欠いた人間として、あるいは自己の名声を
高めるためにことさら大胆かつ乱暴に、ペダンチックな
手段で既成の権威に挑戦した無節操な批評家として、あ
るいは芸術的趣味に欠ける人間として、あるいは「学者
馬鹿」として冷笑する。このような酷評は後述するプー
シキン評価に主として起因するものであった。

ペリンスキイとナヂェーリヂヂンとの直接的接触は一八
三三—一八三六年のわずか三年にすぎない。しかし、
『文学的空想』におけるナヂェーリヂヂンへの論及や右の
三年間の二人の緊密な関係を考慮すれば、ペリンスキイ

難したものととらえてゐる (Вензеров, стр. 444) が、この解釈には相当な無理がある。

- (11) 一八三七年六月二十一日付 K・C・アクサーコフ宛書簡 (XI, 131—132)。
(12) 《Мендель, критик Геге》, 1840 (III, 389—390)。
(13) 《Очерки русской литературы》, 1840 (IV, 11)。
(14) 一八四七年十一月二十二日付 K・Д・カザヘーリン宛書簡 (XII, 432)。

二

リアリズムの思想はそれまでの文学を支配していた古典主義やロマン主義の文学と思想との対決のなかから生まれてくる。そこでまず最初に、ナヂェーシヂンとベリンスキイとはこの古典主義やロマン主義にたいする態度においていかにかわりあっているかを観察してみたい。周知のように、ナヂェーシヂンは反ロマン主義の旗印をかかげてデビューする。『来たる年についての文学的懸念』——以下『文学的懸念』と略称——や『無知なる人々の群』はロマン主義文学にたいする批判を基調としていた。ナヂェーシヂンはそこで、真の詩歌は自己狂乱 (самониступление) にほかならないとするロマン主義

文学が「脈絡も秩序も目的もたない、正真正銘のたわごと」と化してしまっていることを非難する⁽¹⁾とともに、統一ある思想的内容を文学に要求し、芸術美が現代精神の本質的要請たる真と善とを内容となすべきことを主張した⁽²⁾。

ナヂェーシヂンの学位論文は『ロマン主義的と称される詩歌の起源と本質と運命について』という表題のものであるが、「アテネイ」誌に訳載された部分は『その起源から説明される、古典主義的詩歌とロマン主義的詩歌との相違』(《Различие между классическою и романтическою поэзиею, объясняемое из их происхождения》) という題名を、また「ヨーロッパ報知」誌に訳載された部分は『ロマン主義的詩歌の今日の誤用と歪曲について』(《О настоящем злоупотреблении и искажении романтической поэзии》) という題名をそれぞれ、それぞれ内容を異にしていた。前者はその表題からも知られるように、古典主義とロマン主義とがいかにして発生したかを人間の認識活動の推移に即して歴史的に明らかにしようとしたものである。ただし、このばあい古典主義とは古典古代の芸術意識を、ロマン主義とは中世のそれを

意味しており、近代のいわゆる古典主義やロマン主義とは区別されていた。⁽³⁾一方、後者はもっぱら同時代のロマン主義——ナチエージデンの語法にしたがえば「擬ロマン主義」(Ike-Romanismus)の批判にさげられていた。彼がロマン主義を否定するのはその「放埒な疾駆」、「おのれの気まぐれ、夢想、情熱への気ままな服従」、「犯罪的な自己忘却の瞬間にのみ人間の本性が転落しうるようなあらゆる乱行」のゆえであり、⁽⁴⁾自然の不易の法則にしたがって発展する永遠の秩序の無視あるいは良き趣味の歪曲と創造力の墮落への傾向のゆえであった。⁽⁵⁾そしてナチエージデンは古典主義もロマン主義も現代の精神に照応しないとして否定し、古典主義とロマン主義との統合(Soediningenie)の必要を主張する。⁽⁶⁾この「統合」は新たな芸術方法としてのリアリズムを想像させるが、⁽⁷⁾事實はそうでない。彼が要求するのは「理性に支配される自由」の枠のなかに閉じこめることである。⁽⁸⁾こうした主張の裏には芸術とは「完全きわまりないハーモニイ」であるとする芸術観があった。⁽⁹⁾ナチエージデンによれば新しい芸術の創造は「古典古代の聖なる記念碑」の研究によつてのみ可能である。なぜなら、そこにしか知性の

明晰さ、想像力の思慮ぶかいつつまじさ、秩序と調和への愛を見いだしえないからである。⁽⁹⁾ナチエージデンはもとよりいわゆる擬古典主義の研究をよびかけているわけではない。必要なのはあくまでも古典古代の芸術の研究である。しかし、ナチエージデンの学位論文に示された反ロマン主義の芸術観は一種の古典主義としてうけとりうるもののように思われる。ナチエージデン自身もこの論文のあちこちでむしろ古典主義をよしとする考えを示しているし、⁽¹⁰⁾後年に書かれた『自伝』においても二〇年代のロマン主義と古典主義との論争にさいしては内心で古典主義にくみしていたことを告白している。⁽¹¹⁾

ペリンスキイは『文学的空想』ですでに古典主義にたいして明確な態度を示している。彼にとつてヨーロッパの古典主義は文学上のカトリシズム(I, 67)、スコロバの古典主義(I, 96)を意味し、ロシアのそれは「ヨーロッパのこだまの弱々しい反響」以外のなものでもない(I, 96)。古典主義についてのこのような評価はナチエージデンのそれとはかなり異なるものである。一方、ロマン主義は古典主義の支配にたいする知的革命を意味する。

このロマン主義は自然さへの、したがって芸術における自主性と国民性への復帰、形式よりも理念にたいしてあたえられる愛顧、および古代の縁遠き^{ゅうく}つな諸形式の廃棄以外のなにもでもなかつた(168)。

右の一節で「復帰」ということばが用いられているのは、ロマン主義が芸術本来の姿への復帰の動きとしてとらえられているからである。ロマン主義をこのように性格づけるペリンスキイはシャトーブリアン、スタール夫人、バイロン、ユゴーなどとならんでシェイクスピア、ウォルター・スコットをもロマン主義者としてとりあつかっている(169)。このように初期のペリンスキイのロマン主義観はすこぶる未分化の状態にあるものの、やがてリアリズムと名づけられるにいたる芸術方法の構成要素を多分に内包しており、プーシキンのロマン主義概念を想起させる⁽¹⁷⁾。そしてペリンスキイはそのようなものとしてのロマン主義にたいして肯定的にのぞんでいる。そのロマン主義観の可否は別として、ペリンスキイのロ

マン主義観がナヂェーゲンのそれとまったく異なっていることは明瞭である。また古典主義とロマン主義との統合という主張も初期のペリンスキイには見いだせない。

もっともペリンスキイはのちに、「ヨーロッパ報知」時代のナヂェーゲンのロマン主義批判に肯定的に言及し、現代の文学は古典主義的でもロマン主義的でもない、両者の統合されたものでなければならぬとする彼の主張が真理であり、正しい深遠な思想であったと指摘し⁽¹⁸⁾、「知ゆえの悲しみ」論(一八四〇年)ではみずからもそのような所論を展開するにいたる(II, 423—430)。しかしこれはナヂェーゲンの主張の祖述というよりはヘーゲル美学の芸術形式論の独自の敷衍と見るべきであろう⁽¹⁹⁾。ともあれ、ペリンスキイは古典主義とロマン主義にたいする評価にかんしてナヂェーゲンの所説を継承しているとは言いがたい。この点、チュルヌイシェフスキイ(Чернышевский, Николай, Гаврилович, 1828—1889)の判断は正確ではないように思われる⁽²⁰⁾。

(1) Вензеров, стр. 458.

(2) *Ibid.*, pp. 460—462.

- (5) *Ameney*, 1830, ч. I, стр. 7. (M)
 (4) *Вестник Европы*, 1830, No 1, стр. 13, стр. 17, стр. 18. (M)
 (5) *Ibid.*, No 2, p. 128, p. 132. (M)
 (6) *Ibid.*, No 1, p. 13, p. 15; No 2, p. 150
 (7) *Ibid.*, No 1, p. 16.
 (8) *Ibid.*, p. 21.
 (9) *Ibid.*, No 2, p. 132—133.
 (10) *Ibid.*, No 1, p. 25; No 2, p. 125, p. 132, p. 148.
 (11) *Русский вестник*, 1856, т. 2, стр. 59.
 (12) А. Пушкин, *Полное собрание сочинений*, изд. «Правда», т. 5, 1954, стр. 43—45. Нотарионはベリンスキイがロマン主義と云う語をリアリズムの同義語として用ひらるゝと指摘する。(M. Поляков, *Белинский в Москве*, 1948, стр. 165)。
 (13) 《Сто русских литераторов》, 1841 (V, 213).
 (14) 拙稿『ベリンスキイとノーゲル美学(2)』(札幌大学外国語学部紀要「文化と言語」一九六九年第一号所収)参照。
 (15) チェルヌイシェフスキイはベリンスキイがロマン主義との容赦ない論争をナチエージチンから継承したと見てゐる(Н. Г. Чернышевский, *Полное собрание сочинений*, т. III, 1947, стр. 186—189)が、「望遠鏡」時代のベリンスキイについてはそれは言えないし、後年の彼のロマン主義批判はチェルヌイシェフスキイ自身も指摘しているよう

にナチエージチンのそれとは性格を異にしている。

三

つぎに、芸術における現実再現の問題についてナチエージチンとベリンスキイはそれぞれに考えていたかを観察してみよう。

ナチエージチンは『文学的懸念』において、「芸術の仕事はこの(自然を含む広い意味での世界のこと——引用者)永遠なるハーモニイの神秘的な反響を聴きとって、調和したリズムカルな協和音においてわれわれの聴覚に聴きやすいものとしてこれを提供することである」とのべているが、⁽¹⁾このような芸術観から容易に推察しうるように、ナチエージチンは芸術がとりあげるべき事象を特定のものに限定しようとする。世界は嫌悪の対象としてではなく享受の対象として存在するのであって、芸術は汚点を写しとるのでなく、もとのままのうるわしさをとどめた自然を描くべきである、と彼は説き、シェイクスピアやローベ・デ・ベーガが自分の偉大な作品に醜いファルスをもちこんでこれを畸形化せしめたのは無知と不趣味との自己闘争の失敗によるものだとして理解したのであ

った。⁽²⁾

ナヂェーゲンの學位論文や『オネーギン』論にはたしかにリアリズム論を想起させる発言が少なからず見いだされる。學位論文で彼は「芸術は自然の生きた鏡でなければならぬ」と主張し、また『オネーギン』第七章にかんする評論では、詩歌とは「自然の絵画」であり、その価値は詩歌が自然を示すその描写の「忠実さと躍動性と美しさ」にあると説き、詩歌を自然の忠実な鏡とも名づけて、「詩歌をして自然のなかで目にし耳にするものをわれわれにたいして忠実に描かしめよ」と論じている。⁽⁴⁾しかし、これらの主張をもって現実の客観的・全面的再現の要求と見なすわけにはいかない。なぜなら、彼はみずから右の主張を否定しているからである。たとえば、學位論文においては先の主張のすぐあとで芸術は現実の醜いものではなくて、うるわしきものに目を向けるべきだと主張しており、⁽⁵⁾『オネーギン』論においても、かたつむりのつものを出させるのはよいとしても、そのいとわしい醜さをおおいかくしている殻をはぎとってはならない、とのべているのである。⁽⁶⁾このように、ナヂェーゲンの主張には、ポリャーコフの言う「二重性」⁽⁷⁾が認

められる。

しかるに、「望遠鏡」時代のナヂェーゲンの論文には「ヨーロッパ報知」時代とだいがった論調が見られるようになる。ロマン主義にたいする非難はかなり影をひそめる。ヴェンゲーロフが指摘しているような打算にもとづく変節であるか否かは明らかでないが、⁽⁸⁾ある種の変化が認められることは事実である。とりわけ注目に値するのは「望遠鏡」創刊号の巻頭論文『啓蒙の現代の傾向』である。

この論文でナヂェーゲンは學位論文におけると同様に——ただし古典主義やロマン主義という術語はいっさい用いることなく——人間の認識活動の発展を歴史的に考察し、古典古代における精神にたいする自然の支配から中世における自然にたいする精神の支配へと両者の関係が推移してきたとらえ、⁽⁹⁾現代においてはこの両者の「均衡化」、「二つの対極的傾向の統合」への志向が文明の基本的特徴をなしていると説く。そしてこの「統合」とは具体的には「經驗性」(ОПЫТНОСТЬ)を、「物質と精神とのこのうえなく完全な調和」を、「実際の生活への注目」を、「思考と現実とのあいだの統一」を意味してい

た。⁽¹⁰⁾ 要するにナチエージデンは実証的精神をもって現代の基本精神ととらえるのである。そして彼はこのような新しい精神動向は一六世紀に始まるとして、それが経済活動や学問や芸術の領域にいかにか発現されているかを詳細に観察する。わけてもその文学論は注目される。

「新しい詩的精神の眞の傾向は生活の無限の完全さとの全般的な均等化へのたえない志向にあらわれて」おり、文学は「完全さにおいても忠実さにおいても」歴史書にひけをとらず、真理をその標語とし、「存在のあらゆる無限なうずまき」をその理想とする、とナチエージデンは説く。⁽¹¹⁾ そしてロマンというものをこのような新時代の精神にもっともふさわしいジャンルとして位置づけ、ウォルター・スコットをもって「創造活動の現代的精神の眞の代表者」となす。⁽¹²⁾ ナチエージデンはこのような新時代の文学のことを「生活の詩歌」(ПОЭЗИЯ ЖИЗНИ)と名づけている。⁽¹³⁾ 「望遠鏡」創刊号の巻頭論文はそれまでの主張とちがって、文学の生活現実への接近をきわめてはつきりと要求したものであり、その意味でナチエージデンのこの論文にリアリズムの思想への傾向を認めることは妥当と思われる。⁽¹⁴⁾ しかし、同じこの論文でナチエー

ジデンが一面で古典主義における三単一の束縛というものを斥けながら、⁽¹⁵⁾ 反面でその代表的劇作家たるコルネーユやモリエールに「新しい詩的精神の息吹き」、「現代の詩歌の端緒」を見いだしていることも見のがすことはできない。

ベリンスキイは『文学的空想』において、「芸術とは無限に多様な現象における、世界の偉大な理念の表現である」とのべている(134)。この主張でベリンスキイの力点は「無限に多様な」という部分におかれている。バイロンやシラーにおけるような、作者の主観的立場によって現実を恣意的に一面化あるいは単純化する主観主義的な文学を否定し、シェイクスピアにおけるような、現実をまったく客観的に、すなわち現実の諸事象をそのあるがままの姿において再現する文学をもって「眞の創造」となすこと——そこにベリンスキイの主張の眼目があった(132—33)。この要求は、ポリャーコフも指摘しているように、リアリズムの第一の原則を意味する。⁽¹⁷⁾ ロマン主義への論及にさいしてはバイロンもシェイクスピアもロマン主義者として同列に論じられているにもかかわらず、ここでは両者が鋭く対置されている。ネチャ

「エヴァも指摘しているように、ベリンスキイはここで明らかにナヂェーヂヂンの対立者として現われている。ただし、ベリンスキイの本意は芸術の再現対象の限定化の否定にあるからである。

翌年の『ロシアの中編小説とゴーゴリ氏の中編小説について』(以下『ゴーゴリ論』と略称)はリアリズム理論形成に向かってさらに一歩進んだものである。ベリンスキイは生活現象の再現における方法上の相違にもとづいて文学を「理想的詩歌」と「現実的詩歌」の二種に区別する。これらは『文学的空想』におけるシラー・ハイロンの文学とシェイクスピアの文学におおむね照応するものと言えるが、その性格づけはまえよりも発展を示している。「現実的詩歌」とは「生活の現実のあらゆる細部と色彩と陰影とに忠実でありつつ、生活をそのまっただき赤裸と真理において再現する」文学を言う(1, 262)。この「現実的詩歌」は「生活の詩歌」(Поэзия жизни)とも「現実の詩歌」(Поэзия действительности)とも呼ばれ、「現代の真の、そして本物の詩歌」であり、その基本的特徴は「現実への忠実さ」にある(1, 267)。このような「現実的詩歌」をベリンスキイは歴史的形作物

として、すなわち人類の知的成年期の所産としてとらえる。詩歌と現実との結合は一六世紀にセルバンテスとシェイクスピアによって実現される。「真理、最高の真理」——これがシェイクスピアの作品の基本特徴であり、彼は「新しい、真の芸術の時代のまばゆい黎明であり、おごそかな夜明け」である。さらにW・スコットが芸術と生活との結合を完成させる。(1, 264—267)こうしてベリンスキイは現実を忠実に再現する文学をもって新時代の、もっとも時代精神にかなった文学としてとらえ、その歴史的存在理由を主張するのであるが、反面では「理想的詩歌」にたいしても新時代における市民権を拒否しきれず、そこに一定の矛盾を見せている。しかし彼の心が前者に傾いていることは否めない(1, 270)。

ベリンスキイの『ゴーゴリ論』はいくつかの点でナヂェーヂヂンの『啓蒙の現代の傾向』の論調を想起させる。とりわけ「現実的詩歌」の歴史的意味づけ、芸術の現実性の主張、スコットの位置づけなどにおいては「生活の詩歌」という用語を含めてナヂェーヂヂンの所説を継承しているように思われる。こうした継承はベリンスキイのジャンル論——とくにロマンの意味づけ——や創作過

程論にも認められる⁽²⁰⁾。しかし言うまでもなくこの継承は直線的なもので受動的なものでもない。そこにはナリンスキイ独自の思想の展開が認められる。シェイクスピアを「現実的詩歌」の先駆者となす観点はナチャエーリヂンには見られないし、また逆にコルネーユやモリエールに新時代の、すなわち現実的文学の端緒を見いだす観点はペリンスキイにはまったく見られない。『文学的空想』や『ユーゴリ論』には文学における客観性や現実への忠実さの要求と並んで、典型化と個性化にかんする思想がすでに認められる——たとえば『文学的空想』におけるグリボエードフ論(I, 81)やムルザツク論(I, 84)、『ユーゴリ論』における創作過程論(I, 287)やユーゴリの中編小説の分析(I, 289, 296)のなかに。これらの思想は後年におけるほど十分な意味づけがなされているわけでもなく、また対象の客観的再現の要求と意識的に関係づけられているわけでもない。しかしこれらの命題もまたナチャエーリヂンには見うけられないものである。

- (1) Венгеров, стр. 459.
- (2) *Ibid.*, p. 467.
- (3) *Вестник Европы*, 1830, No 1, стр. 22.

- (4) *Ibid.*, 1830, No 7, pp. 213—214. (M)
- (5) *Ibid.*, 1830, No 1, pp. 22—23.
- (6) *Ibid.*, 1830, No 7, pp. 214—215.
- (7) М. Поляков, *Белинский в Москве*, 1948, стр. 103—104.

(8) ヴェンゲロフはこの転向をプーシキンの機嫌をとらうという商策によるものと見づる。(Venigeroフ, стр. 403—404.)

- (9) *Телеграф*, 1831, ч. 1, стр. 1—8. (M)
- (10) *Ibid.*, pp. 9—11, p. 28.
- (11) *Ibid.*, p. 33.
- (12) *Ibid.*, pp. 37—38.
- (13) *Ibid.*, p. 39.

(14) 多くの研究者は「ヨーロッパ報知」時代のナチャエーリヂンの諸論文にすでに矛盾した形態におけるリアリズム思想の芽を見いだす(たとえば АН СССР, *История русской критики*, т. 1, 1958, стр. 266; П. Мезенцев, *Белинский*, 1957, стр. 86—87; М. Поляков, *Виссаярион Белинский*, 1960, стр. 132)。しかし、『啓蒙の現代の傾向』は「ヨーロッパ報知」時代の諸論文とは論調がかなりちがっており、リアリズム思想への芽が認められるとすればむしろこの論文においてこそそうだとすべからぬのと同じに思われる。

- (15) *Телеграф*, 1831, ч. 1, стр. 35—36.

- (16) *Ibid.*, p. 13.
(17) M. Поляков, *Виссарион Белинский*, 1960, стр. 176.
(18) В. С. Нецаева, *op. cit.*, p. 273.
(19) ホリヤロフにも同様の指摘が見られる (M. Поляков, *op. cit.*, p. 213)。
(20) См. АН СССР, *История философии в СССР в пяти томах*, т. 2, 1968, стр. 281; Ю. Манн, *Русская философская эстетика*, М., 1969, стр. 60.

四

最後にプーシキンの評価をめぐる諸問題を検討してみたい。

プーシキンの『ヌーリン伯』が一八二八年に刊行されると、ナヂェーヂデンは翌年の「ヨーロッパ報知」にその批評を書いた。『二編の韻文小説——「舞踏会」と「ヌーリン伯」がそれである。ナヂェーヂデンの批評はすこぶるつめたいもので、題名をもじってこの作品を「ゼロ」(ロシア語で「ヌーリ」と言う)と評し、内容の分析にも値しない「石けんの泡」のようなものだときめつける。ナヂェーヂデンは『ヌーリン伯』に自然のみごとな描写を認め、かつ詩人が自然の忠実な画家でなければ

ならないとする思想にも同意を示すのであるが、絵として美しいだけでは不十分だと考えるのである。⁽³⁾『ヌーリン伯』にたいするこのような冷笑は『無知なる人々の群』や『望遠鏡』時代の評論『文学的制裁』(«Литературная расправа», 1833)にも見いだされる。⁽⁴⁾ナヂェーヂデンは一八二九年に『ポルタヴァ』についても批評を書くが、その基調は、プーシキンは真の意味での詩人ではなくて、才能ある「へぼ詩人」ないし「派手なモザイク風の琥珀織」の名手にすぎず、その本性はただ嘲弄せんがためのみすべてを冷笑することであり、プーシキンの詩はただのパロディにすぎない、というものであったと言われ⁽⁵⁾る。また、ロマン主義を非難した学位論文においてはプーシキンの『ジブシー』や『盗賊の兄弟』に触れ、これらの作品を「ロマン主義の商標のもとに提供されるばかりかばかしいたわごと」になぞらえている。⁽⁶⁾

一八三〇年に『オネーギン』の第七章が発表されると、ナヂェーヂデンはすぐ「ヨーロッパ報知」でこれを取りあげる。彼はロマン主義者たちのようにプーシキンを「現代の人類の代表者」であるとか「偉大な天才」であると⁽⁷⁾かして高くもちあげることには同意しないが、プー

シキンの気まぐれな筆の下から惚ればれとするような絵がしばしば生まれおちることを歓迎し、プーシキンの才能がおのれの道を歩みさえすればロシアの文学の地平にまばゆい星となって輝くであろうとのべ、非バイロン化をプーシキンに忠告した⁽⁹⁾。プーシキンの独自の才能とはナヂェージデンによれば、自然を正面から見すえるのでなしに、これを裏返しにしてアラベスクをしたであげることにあつた⁽¹⁰⁾。『オネーギン』そのもの——それまでに発表された第六章まで——については天才的な作品とは決して言えないとしつつも、『ルスランとリュドミラ』後の作品のなかでプーシキンの独自の才能が発揮された唯一の作品であるとしてこれを好意的に評価している⁽¹¹⁾。『オネーギン』の第七章については、そこにいかなる思想も感情も認められず、絵の美しさのみが価値をなしている⁽¹²⁾と見た。とりわけ、モスクワを描いた場面については「このうえなく貴い宝庫」であり、そのみがこの章の「詩的現実性」(поэтическая реальность)を形づくっていて、そこにプーシキンの才能がいかなく発揮されていると論じている⁽¹³⁾。

このように、ナヂェージデンは『オネーギン』におけ

る自然のリアルな描写というものはこれを高く評価するのであるが、全体としての作品そのものは、裏側から見た生活についての空想的な観察をはじめこむのに都合がよいと見なされた枠組にすぎず、はめこまれた絵は大部分が魅力的であるが、枠組そのものできばえはよくない、ととらえたのであつた⁽¹⁴⁾。こうした評価は『オネーギン』第八章(終章)が発表された(一八三二年)のちも変わらない。ナヂェージデンはこの第八章についても「望遠鏡」に批評を書くが、全体としての『オネーギン』は彼の目には「ファンタジーのいとまの気ままな結実」としか写らず、そこに彼は内容の統一性も構成の全一性も見いだすことはできなかった⁽¹⁵⁾。一八三三年には『オネーギン』の全章が一冊にまとめられて刊行されるが、この年の文学界の動向を概観した論文では「エヴゲーニイ・オネーギンのとめどない生活」が終わったと言う、つめたい、ささやかな言及が見られる程度で、その年の成果をゼロと見ている⁽¹⁶⁾。ナヂェージデンは『オネーギン』の個々の部分にリアルな現実描写を見いだしたとしても、全体としての作品のロシア文学史における画期的意味というものはついにとらええなかつたと言うべきである

う。

『オネーギン』第七章について論じた前掲の評論のなかでナヂエーゲンは『ボリス・ゴドゥノフ』に言及しこれを焼きすてて『オネーギン』を完成するよう作者に忠告した。⁽¹⁷⁾だが、ナヂエーゲンのこの発言は、『ボリス・ゴドゥノフ』の一断章しか発表されていなかった時点でのものであり、⁽¹⁸⁾他意のある発言ではなかったように思われる。彼の本意は「非バイロン化」をプーシキンに忠告することにあつたと見られるからである。ナヂエーゲンの右の発言のちほどなくして『ボリス・ゴドゥノフ』の全編が刊行される(一八三〇年十二月)。ナヂエーゲンはすぐさま「望遠鏡」でこれを取りあげて、詳細な分析を加えた。彼はロマン主義者の側からの予想されるさまざまな作品批判にまえて反論するということ形で所説を展開するのであるが、その基調は、個々の人物や場面の描写には不自然さが見られなくはないが、ボリス・ゴドゥノフをはじめとする一連の重要人物はおどろくほどみごとに、しかもリアルに描かれているという主張にあり、作品の真実性というものを判断の主たる基準として総じてきわめて肯定的な評価をあたえたので

あつた。それと同時に、ナヂエーゲンは『ボリス・ゴドゥノフ』にプーシキンの作風の変化を見いだす。プーシキンは「調子をあらため、少しまじめになることを思いたつた」のであり、いまでは「さえずるのではなしに、うなっている」と、ナヂエーゲンはのべる。⁽¹⁹⁾しかし、ナヂエーゲンのこの発言をもって、プーシキン文学のリアリズムへの転換を的確に察知したものと受けとりうるか否かは疑問である。プーシキンの気ままなファンタジーはアラベスクにすぐれ、カリカチュアにのみ向いているという、『ポルタヴァ』評や『オネーギン』評に見られるような判断を彼がここでも示していることを見のがすわけには行かない。⁽²⁰⁾

このあと、ナヂエーゲンはプーシキンの『コロムナの小屋』にも簡単にふれている(《Итрепарыpha pacн-paba》)が、その評価はまったくつめたく、これを『ヌーリン伯』⁽²¹⁾よりも比較にならないほど劣った作品ときめつけている。

ナヂエーゲンの右のようなプーシキン評価にたいしてベリンスキイはナヂエーゲンと縁を切つてのちはげしい批判を加えるようになる。一八三七年のある手紙で

はナチェーリジヂンの『ポルタヴァ』論に言及、一八三一年以前のジャーナリズムの愚かな状態のみがナチェーリジヂンにある種の権威をもたらしたのだと怒りを示す。⁽²²⁾また『ゲーテ批評家メンツェル』(Menzel, Kritik Gete), 1840)ではナチェーリジヂンの『ポルタヴァ』論をはじめとするプーシキン批評をとりあげ、彼が論証ぬきの乱暴な方法を用いて、すなわちもったいぶったポーズと荒々しいことばをたくみに弄することによってプーシキンをのしつたことを非難する(III, 389—390)。「アレクサンドル・プーシキンの作品」(《Сочинения Александра Пушкина》, 1843—1846)においてもナチェーリジヂンがプーシキンに「荒々しく反逆した」こと、プーシキンをたんにバイロンの亜流としかとらえなかったこと(VII, 304)、あるいは『オネーギン』の価値を見ぬけなかったことを非とする(VII, 444—445)。ナチェーリジヂンの『オネーギン』論への批判的言及は『ホテルブルク文集』(《Петербургский сборник》, 1846)にも見られる(IX, 546)。晩年の『一八四七年のロシア文学の概観』(《Взгляд на русскую литературу 1847 года》, 1847—1848)ではナチェーリジヂンがその『ヌーリン伯』評にお

いて「シニズムに達するほどの不作法」をもってプーシキンを非難したことをとがめる(X, 289)。

このように「望遠鏡」を離れてのちのベリンスキイは一貫してナチェーリジヂンのプーシキン評価に批判を加えて行くのであるが、「望遠鏡」時代のベリンスキイの諸論文にはこのような批判は見あたらない。しかし、そのことは当時のベリンスキイがナチェーリジヂンのプーシキン評価をそのまま受け取っていたことを意味するものではない。

「望遠鏡」時代のベリンスキイはプーシキンやその他の作品についてナチェーリジヂンほどまとまった文章を書いていないが、あちこちに散在している、プーシキンへの論及をひろいあつてみると、ナチェーリジヂンにおけるとはかなりちがったプーシキン像が組み立てられるように思われる。

『ヌーリン伯』についての直接的論及は初期のベリンスキイには見あたらないが、『文学的空想』には、『ヌーリン伯』をバラトウインスキイの作品『舞踏会』と并列に論じることが後者をはずかしめ、前者の価値を知らぬことを意味するという発言が見られ(1, 94)、これをも

って暗にナヂェージデンをも批判したものと受けとれぬこともない。⁽²³⁾『カフカースのとりこ』、『バフチサライの噴水』、『ジブシー』のようなロマン主義的な作品についてはベリンスキイの評価もそう高くはなく、ヨーロッパの詩人ならだれでも書きえただろうと指摘し^(I, 94)、ほぼナヂェージデンに近い評価をあたえている。また『ボリス・ゴドゥノフ』については学生時代にすでにその生活描写のリアリティに感動していたことがつたえられているが、⁽²⁴⁾『ゴゴリ論』においてもそこに「ロシアの生活の真実」が見られると指摘し^(I, 274)、ナヂェージデンに近い見解を示している。しかし、『オネーギン』の評価および『オネーギン』と『ボリス・ゴドゥノフ』の史的位置づけはナヂェージデンのそれとはかなり異なっているように思われる。

ベリンスキイはプーシキンと言えば『オネーギン』を思いうかべると語り^(I, 346)、あるいはこれを「偉大で不滅の作品」と評し、そこでは個々の詩句は思想と感情を体現しているとのべている^(I, 366)。また別の論文では『オネーギン』を「人物と思想と感情の生きた、動く世界」であると評してもいる^(II, 150)。ベリンスキ

イにとって『オネーギン』と『ボリス・ゴドゥノフ』とはそれまでに発表されたプーシキンの作品のなかで「詩の花冠のこのうえなく貴いダイヤモンド」であり^(I, 73)、ロシアの詩人のみが書きうる作品であった^(I, 94)。『オネーギン』と『ボリス・ゴドゥノフ』にたいするこのような熱っぽい評価はナヂェージデンには見られぬものである。

「望遠鏡」時代のベリンスキイはプーシキンのすべての作品を高く評価していたわけではない。プーシキンの中編小説やお伽話には概して否定的にのぞんでいた^(I, 139; II, 28)。しかし、それにもかかわらず、ベリンスキイがプーシキンにあたえている文学史上の位置づけはすこぶる高いものであった。彼はロシア文学史における一八二〇年代をプーシキン時代と名づけ^(I, 69)、このプーシキン時代にロシアの文学がはじめて生命を燃焼させ、ヨーロッパのすべての知的生活を追体験したと見る^(I, 69-70)。ベリンスキイは一八二〇年代の輝かしき領袖であったプーシキンをヨーロッパのロマン主義者のたんなる亜流と見ることが否定する。そして旧来の掟に疑いをはさみ、新しい別の考え方があることを知りかけ

たばかりのロシアという国の先駆者となって自己の時代のあらゆる階音、協和音をためてみたロシア文学上の革新者として、さらには同時代の世界の人類のロシアにおける代表者としてプーシキンを位置づけるのである(1.72)。このような、同時代の他の作家たちに比しての、異常と言えるような高いプーシキン評価もまたナヂェージデンには見られないものである。

なるほどペリンスキイはプーシキンをロマン主義者ととらえていた。しかし、まえにものべたようにペリンスキイのロマン主義観はナヂェージデンのそれと異なり、リアリズムという新しい文学傾向を先どりした側面をつよくもっていた。彼はヂェルジャーヴィンをもロマン主義者にとらえており(1.96)、その点で彼のロマン主義観のあいまいさは否めない。しかし、『オネーギン』や『ボリス・ゴドゥノフ』への高い評価と考えあわせると、ペリンスキイがプーシキンにあたえている高い位置づけは、「ロマン主義者」プーシキンのなかにリアリズム文学の先駆者をより多く見てとったことによるものだと受けとってよい。

周知のようにヂェルヌイシェフスキイはその『ロシア

文学のゴーゴリ時代論集』においてナヂェージデンのプーシキン評に論及しているが、ヂェルヌイシェフスキイの所論はかなりナヂェージデンに好意的なもので、彼のプーシキン評価はおおむね正当であったと見ている⁽²⁵⁾。しかし、ペリンスキイがそう見ていなかったことはすでにのべたとおりであり、ヂェルヌイシェフスキイの評価はかなり甘いように思われる。ナヂェージデンがプーシキンの作品のなかで高く評価したものは『ボリス・ゴドゥノフ』だけだと言ってよいし、この悲劇をはじめとする一連の作品のなかに自然に忠実な絵が認められることを指摘していたことはたしかに事実であるにせよ、その指摘はたんなる指摘にとどまるくらいがあり、そのことの文学方法史上の意味づけにまでおよばなかった。また『ボリス・ゴドゥノフ』におけるプーシキンのリアリズムへの転換をナヂェージデンはプーシキンの声音の変化としてしかとらえることができなかった。ナヂェージデンは『啓蒙の現代の傾向』において現実との接近をもって新時代の文学の精神であるとし、ロシアはその点で誇るべき過去はもたないとしても未来に期待するところはきわめて大きいとのべたのであったが、結局、『オネーギ

ン』や『ボリス・ゴドゥノフ』を生みおとしたプーシキンをロシアにおけるそのまうな動向の先がけとしてとらえることはできなかった。ポリャロフの言うようにこれを「最大の誤謬」と呼びうるか否かは別として、ナチュージチンがロシア文学の運命にとってのプーシキンのリアリズム文学の意義の理解にまではおとはなかったというメセンツェフの指摘は首肯しうるものである。

- (1) *Тропа к Пушкину, под общей редакцией С. М. Бонди, М., 1967, стр. 54.* 以下、プーシキンの著作の表年表に引くは本書に拠る。
- (2) *Венгеров, стр. 493.*
- (3) *Ibid., p. 494.*
- (4) *Ibid., p. 490; Телескоп, 1833, ч. 14, стр. 101.*
- (5) Д. Д. Благой, *Теоретический путь Пушкина, М., 1967, стр. 305.*
- (6) *Вестник Европы, 1830, No 2, стр. 148.*
- (7) *Ibid., 1830, No 7, p. 197. (M)*
- (8) *Ibid., p. 195.*
- (9) *Ibid., p. 200.*
- (10) *Ibid., pp. 202.*
- (11) *Ibid.*
- (12) *Ibid., p. 212.*

- (13) *Ibid., p. 219.*
- (14) *Ibid., p. 223.*
- (15) М. Г. Зельдович, Л. Я. Лившиц, *Русская литература XIX в., хрестоматия критических материалов, изд. 3, М., 1967, стр. 188—189.*
- (16) *Телескоп, 1834, ч. 19, стр. 8. (M)*
- (17) *Вестник Европы, 1830, No 7, стр. 200.*
- (18) 『チャーフ修道院の僧房』の場のみが一八二七年に発表された。
- (19) *Телескоп, 1831, ч. 1, стр. 573. (M)*
- (20) *Ibid., p. 567.*
- (21) *Ibid., 1833, ч. 14, стр. 100—101.*
- (22) 一八三七年六月二十一日セル・コンツァーロフ宛(XI, 131)。
- (23) ナチュージチン全集の注に「プーシキンの発言はトットマン(Плаксин, В. Т.)に引かれたものであり、(I, 524)は、ナチュージチンと同一性格の証書であることが指摘されたものである。」
- (24) *Воспоминания, стр. 41.*
- (25) Н. Г. Чернышевский, *Полное собрание сочинений, т. III, стр. 157—158.*
- (26) *Телескоп, 1831, ч. 1, стр. 40.*
- (27) М. Поляков, *Виссаяон Белянский, стр. 139—*

(28) II. Mezenber, op. cit., p. 87.

五

ナヂェーリジヂンの仕事の評価についても、ナヂェーリジジンとペリンスキイとの関係の理解についてもこれまで大別して二様の見地があるが、そのいずれを是とすべきかは、まだ研究が進んでいないため結着がついていないようである。⁽¹⁾ 第一の見解はナヂェーリジジンの死の直後に書かれた『ロシア文学のゴゴリ時代論集』においてチエルヌイシエフスキイが提示したものである。チエルヌイシエフスキイはナヂェーリジジンをペリンスキイの育成者としてとらえ、主としてその点にナヂェーリジジンの功績を見いだす。⁽²⁾ 同時に彼はナヂェーリジジンの仕事に一定の限界を認めてもいる。ナヂェーリジジンが正しい文学観を植えつけるといふ仕事を開始したにとどまるとすれば、ペリンスキイはこの仕事をまさに成就したのであり、⁽³⁾ ナヂェーリジジンの「弟子および継承者」として登場したペリンスキイは「ナヂェーリジジンが立ちどまったまさにその地点から始めた」⁽⁴⁾——これがチエルヌイシエフスキイ

の評価である。今日のソ連の研究者の多くはほぼこのチエルヌイシエフスキイの見地を踏襲しているように見うけられる。第二の見地はヴェンゲーロフのもので、彼はチエルヌイシエフスキイがほとんど顧慮しなかったペリンスキイやその同時代人たちのナヂェーリジジン批判に依拠して、ナヂェーリジジンが節操も信念もたないえせ学者、えせ批評家であったことを立証しようとし、⁽⁵⁾ したがってペリンスキイとの関係についてもナヂェーリジジンの影響の事実そのものは否定しないと、この影響はペリンスキイにとってマイナスでしかなかったと見るのである。⁽⁶⁾

ヴェンゲーロフの仕事はナヂェーリジジンとペリンスキイとの継承関係を実証的に究明しようとした試みとして重要な価値をもつものであるが、残念ながら実証力が乏しい。一方、チエルヌイシエフスキイをはじめその流れを汲む研究者たちは両者の継承関係よりは両者の文芸思想史上の客観的位置づけに意を用いてきたように思われる。したがって、ペリンスキイにおけるリアリズム思想の形成にナヂェーリジジンがいかにかかわっているかという問題も実証的にはまだ明らかにされていない状況にあ

る。

ベリンスキイはナヂェージデンについてもっとも包括的な評価をくだしている一八四一年の『ロシア文学百人集』論のなかで、ナヂェージデンに主張とその適用とのあからさまな矛盾——たとえば理論的には古典主義を拒否しつつも実践的にはコルネーユ、ラシーヌ、モリエールを称揚したり、あるいはシェイクスピア、プーシキンをロマン主義者としてこきおろしたりするという——が見られることを指摘している(VI, 23—24)が、前節までの観察からベリンスキイのこの指摘のかなりの妥当性を認めないわけには行かない。ナヂェージデンにリアリズム思想の芽はえが見られるとしても、それは「ヨーロッパ報知」時代にあつては相矛盾する諸命題と共存していたのであり、「望遠鏡」時代にあつては首尾一貫していなかった。また、このリアリズムの思想の芽はナヂェージデンの文芸思想全体のなかで核心的位置を占めているわけでもない。

チエルヌイシエフスキイのナヂェージデン評価は、レベヂェフリポリヤンスキイも指摘するようにかなり過大であるように思われる。ベリンスキイのリアリズム思想

は後年においてはもとよりだが、「望遠鏡」時代の出発点においてさえナヂェージデンのぞかせていたその芽とはかなり異なっている。この面でベリンスキイはたしかにナヂェージデンからあれやこれやを継承している。しかし、それは、ナヂェージデンのなかに矛盾した、首尾一貫しない、舌足らずな、無自覚的な、ヴェンゲーロフのことばを借りれば「ことのついでに」筆の下からもれ出たかのような状態で顔をのぞかせていたリアリズム思想の芽をベリンスキイが独自の力で自分の体系のなかに移しかえ、成育した、という意味においてである。「望遠鏡」時代のベリンスキイの諸論文にナヂェージデンとの隠然たる論争を感じると指摘し、ベリンスキイはそもそも最初からナヂェージデンに批判的にのみ、自分に縁遠い思想を大胆に非難していたとするネチャエヴァの見解は⁽⁹⁾妥当なものと思われる。少なくともリアリズム思想の形成にかんするかぎり、ナヂェージデンの仕事が客観的にそれを準備したとは言っても、ベリンスキイにおけるこの理論の形成に直接的に寄与したと言いうるか否かは疑わしい。

(1) その経緯については O. Mann, *op. cit.*, *Frana II*, H.

- И. Надеждин—предшественник Беллинского. 参照。
- (2) Н. Г. Чернышевский, *Полное собрание сочинений*, т. III, стр. 140.
 - (3) *Ibid.*, р. 177.
 - (4) *Ibid.*, р. 183.
 - (5) Венгеров, стр. 400—407.
 - (6) *Ibid.*, рр. 397—399.
 - (7) П. И. Лебедев-Полянский, В. Г. Беллинский, М.-Л., 1945, стр. 33.
 - (8) Венгеров, стр. 397.
 - (9) В. С. Нечаева, *op. cit.*, р. 198.
- (札幌大学助教授)